

はじめに

※ 〈わたし〉から始まる社会学って？

社会学は社会に関することならたいい研究対象にできる。では、どうやって？ こちらは難題である。この頂へ至る道はいくつもあり、しかも新しい道がどんどんできる。

本書『〈わたし〉から始まる社会学』では、〈わたし〉から始める、という点に軸を定め、身近な問いから、自分のなかの「なんで？」から始めて、その問いに潜む社会の特性を考えるとところまで飛翔する。その面白みと、わたしの問題を社会につなげることで生まれる威力をぜひ味わっていただきたい。

※ 個人的なことは社会的である

個人的なことは社会的である（パーソナル・イズ・ポリティカル）。この言葉を聞いたことがあるだろうか。自分だけの悩みだと思っていたこと、たとえば恋人との関係や自分の体型についての悩みなどが、実は社会的に規定された、社会によって生み出された問題であることを告発する視点である。わたしの問題を社会に接続し一般化するためには、問題の根っこを探りあてなければならない。今流の自己責任の対極である。「社会が悪い」といっても何も解決しないという意見もあるだろう。たしかに社会が悪いといっても何のことかわからない。いったい社会の何が、どう、〈わたし〉の問題とつながっているのか、そこを可視化しなければ始まらない。

このパーソナル・イズ・ポリティカルに馴染みがない方は、まず落合恵美子の「序」から読んでほしい。ついでに最後の「インタビュー・エッセイ 落合恵美子に聞く！」も。あるいは順序は逆でもいいかもしれない。きっと、〈わたし〉から始まる社会学のおぼろげな像が立ち現れるだろう。

実は本書は、〈わたし〉から社会学を始め、そして「総合科学としての社会学」までたどり着いた希有な社会学者、落合恵美子の背中を見て社会学に惚れ、やがて社会学者になった人たちが集い、編んだ一冊である。落合は社会史・歴

史社会学・近代家族論・親族ネットワーク論・福祉レジーム論・国際移動研究・日本研究・ケア論など、さまざまな角度・方法から、ジェンダーや家族のなかに潜む「なぜ？」を考え続けてきた。どの方法、どの分野でも、ブルドーザーのように荒野を開拓してきた。それだけに後から続く者たちの歩みも実に多様である。この多面性を表したくて、本書には「家族とジェンダーから歴史、そして世界へ」という副題を付けた。

※ 総合科学としての社会学

社会学は今から 150 年ほど前にヨーロッパで誕生した比較的新しい学問である。社会学の立ち上げに際しては、経済学とも政治学とも、また法学ともちがう、独自の専門科学としての社会学をめざす立場（デュルケームなど）と、社会諸科学を総合する点に固有の価値を認める総合科学としての社会学をめざす立場があった（ウェーバーなど）。いずれであれ、社会学というものに、ほかの社会諸科学とはちがう独自の価値を見出そうとして格闘した結果、生みだされてきた。

現代は、社会学のみならず、たいていの学問が細分化されている。個別の課題に対して厳密な科学的手続きで迫るスタイルが価値をもつ。問題を切り刻み、科学的にアプローチしなければ査読論文として認められない。しかしこの方法を突き詰めるだけではリアリティが失われ、社会を扱うといいながら社会がますます見えなくなる。

もうずいぶん前から壮大な一般理論は「死んだ」といわれている。今求められているのは、かつての一般理論とはちがうかたちで、細分化した知を統合するための、複雑な社会を理解するための「見取り図」ではないだろうか。もちろん見取り図は 1 つである必要はない、いくつもあれば頼もしい。

落合は〈わたし〉から社会学を始め、〈わたし〉を語る言葉を、そして論理を紡いできた。近代家族論、親族ネットワーク論、家族の戦後体制、日本家族の日本化として。そして今、家族研究や福祉国家論、国際移動研究などを総合し、あらたに親密圏と公共圏の再編をめざす総合科学としての社会学をもくろんでいる。

この大きな山に挑むのは並大抵のことではない。近くで見えていても恐ろしく

厳しい道のりのように見える。けれども落合は（根っここのところで）実に楽しそうに登っている。そんな落合の背中を見て、本書の書き手たちは〈わたし〉の問いを社会へと接続するための、それぞれの道を模索してきた。短い1本の論文で、はたしてどこまでそれが伝わるか、幾分心許ないところはあるが、それぞれの書き手が〈わたし〉から始めて、1つの「社会」を見ようとした悪戦苦闘の跡がいくばくかでも伝わればと思う。それぞれに道のりは長く、その「はじまり」が必ずしも書かれているわけではない。彼らのめざす最終ゴールがどこなのかも必ずしも明快とはいえない。いまだゴールがどこかは書き手にもわからないこともある。道なき道を進むのだから当然であろう。それでも読み手である皆さんにも〈わたし〉の問題を社会へと接続するそのプロセスに思いを馳せていただき、そのワクワク感、格闘の跡をいくらかでも共有していただければと思う。

わたしたちの背後にあって、見ようとしなければ見えないシステムを可視化する、そんな社会学の醍醐味を味わっていただければありがたい。読み終わった暁には、皆さんも〈自分の〉社会学を始めたくなっているかもしれません。

※ 家族とジェンダーから歴史、そして世界へ

今、わたしたちが当たり前だと思う家族、夫婦や親子といった近親者だけで暮らす、子どもを中心とした暮らし、妻は家事・育児（＋仕事）／夫は仕事といった性別役割分業、これを「近代家族」と名付け、20世紀に登場し、戦後一般化した歴史的産物にとらえたのが落合恵美子である。それから四半世紀。その近代家族は変わったのか。この問題をあらためて問うのが第Ⅰ部である。

第1章では妻の労働形態に注目しながら妻と夫の総労働時間に注目し、性別役割分業の今を考える。第2章では「日本のジェンダー構造」では見過ごされてしまう県単位の分析から性別役割分業の新たな側面を描き出す。第3章では落合により四半世紀前に提出された近代家族概念が、マスメディアにどの程度浸透したのか、新聞報道の言説が検討される。第4章では女性も働くことが当たり前であった社会主義中国から、近代家族観が広がり新たに「専業ママ」が台頭してきた現代までの母親規範の変遷を問う。そして第5章では中国の母娘関係と北米で暮らす中国系の母娘関係の対比が、事例を通して示される。

いずれも近代家族論のなかで幾度も俎上にあげられてきた問題を扱っているが、ユニークな切り口からアプローチし、見たことのない地点へ導いてくれる。

第Ⅰ部で扱った近代家族論の肝は、わたしたちが当たり前と思っていた家族を、1つの歴史的産物と位置づけたところにあった。家族の情緒的関係も、役割構造も、時代ごとの社会構造により規定されるものであり、時代が変われば変化する。

このような歴史社会学的研究から何がわかるのか、第Ⅱ部が問題にするのはここである。まず第6章では歴史人口学的方法を用いて離婚後の子どもの所属が問われる。目下、離婚後の子どもの親権をめぐるのは法制審議会で議論が行われているところであり、従来からの単独親権を維持するのか、共同親権も選べるようにするのか、熱い議論が戦わされている。第6章ではこの問いを歴史社会学的に検討する。第7章では伝統家族に付与されるさまざまなイメージが問いなおされる。伝統といっても一枚岩ではなく、双系的な基層構造に時代ごとの変化が幾重にも覆い被さり現代が形作られる。このような伝統家族のねじれた複雑な特性を読み直し、わたしたちの来し方、自画像の再編をめざす。第8章では日本の伝統家族の軸である祖先祭祀に注目し、その変容と家の成立との関係性を問う。第9章では、忘れられた大正時代の社会学者、権田保之介に光をあて、近代資本主義の成立過程における民衆による文化の創造性へのオリジナルな研究を再評価するとともに、独自の民衆娯楽論を打ち立てた権田でさえ、大きな時代の風潮からは免れえなかったことを指摘する。

第Ⅲ部では、「外国人の子ども」や「国際結婚」、「移民」といった越境する人々に焦点をあてた議論が続く。落合の考えるケア論で、国家、市場、家族・親族、コミュニティという4つのケア部門のバランスを示すケアダイヤモンドが用いられる。当然ながら、ケアは国家の諸制度や文化の大きな影響下にある。第Ⅲ部で論じられる国境を越える人々は、ときにその狭間でさまざまな苦労を強いられる。また、狭間にあるが故に彼らに注目することで「国家」の壁、国家の影響が可視化される。細やかな配慮で「彼ら」に寄り添いながら、鋭い観察眼でマイノリティの視点から社会を読み解く。

最後はハンガリー出身の家族社会学者（現・立命館大学教授）で、何カ国語をも操るライカイ・ジョンボルによる非西欧文化圏の家族研究が紹介される。落

合の背中を見て育った者たちは、日本、東アジア、フランス、そして東欧へと世界を股にかけて議論する。

また各部にはコラムもある。いずれも社会学的含蓄のある濃い内容が、リーダブルな読み物にまとめられている。それぞれの筆致をお楽しみいただきたい。

それでは、どこからでも好きなところから、わたしたちの〈わたし〉から始めた社会学を読んでみてください。ここから皆さんの社会学が始まることを願いつつ。

平井 晶子

執筆者紹介

(執筆順, *は編者)

***平井 晶子** (ひらい しょうこ) はじめに, 第7章, インタビュー・エッセイ
神戸大学人文学研究科教授
(主要著作) 『日本の家族とライフコース——「家」生成の歴史社会学』ミネルヴァ
書房, 2008年。『リーディングス アジアの家族と親密圏』全3巻(落合恵美子・森
本一彦との共編)有斐閣, 2022年。

***落合恵美子** (おちあい えみこ) 序
京都大学文学研究科教授
(主要著作) 『親密圏と公共圏の社会学——ケアの20世紀体制を超えて』有斐閣,
2023年。『近代家族とフェミニズム(増補新版)』勁草書房, 2022年。

片田 孫朝日 (かただ そん あさひ) 第1章
灘中学校・高等学校公民科教諭
(主要著作) 『男子の権力』京都大学学術出版会, 2014年。「外国にルーツをもつ『日
本人』のこと——移民や外国人が住みやすい社会に向けて」編者代表伏見裕子『ふ
らっとライフ——それぞれの「日常」からみえる社会』北樹出版, 2020年。

織田 暁子 (おだ あきこ) 第2章
仁愛大学人間学部コミュニケーション学科准教授
(主要著作) 「福井県内における『性別欄』の現状と取組」『中部教育学会紀要』20:
1-17, 2020年。「性別職域分離は地域によってどう異なるか——日本における分
析」(共著) 太郎丸博編『東アジアの労働市場と社会階層』京都大学学術出版会,
2014年。

***中里 英樹** (なかざと ひでき) 第3章
甲南大学文学部教授
(主要著作) 『男性育休の社会学』さいはて社, 2023年3月予定。「育児休業——男性
の取得を促す制度の国際比較を中心に」落合恵美子編『どうする日本の家族政策』
ミネルヴァ書房, 2021年。

鄭 楊 (てい よう) 第4章
中国哈爾濱師範大学東方言語学院教授(京都大学招へい外国人研究者)
(主要著作) 『転換期を生きる中国都市家族の育児と女性たち』大阪公立大学共同出
版会, 2019年。落合恵美子著, 鄭楊訳『21世紀日本家族——何去何从』社会科学
文献出版社, 2021年。

郝 洪 芳 (かく こうほう)

第5章

ミシガン大学日本研究センター連携研究員

〈主要著作〉『東アジアの紹介型国際結婚——グローバルな家族と越境する親密性』明石書店, 2021年。「国際結婚移住と親密性の変容——中国東北地域のグローバル家族の事例から」坂部晶子編著『中国の家族とジェンダー——社会主義的近代化から転形期における女性のライフコース』明石書店, 2021年。

戸 江 哲 理 (とえ てつり)

コラム①

神戸女学院大学文学部准教授

〈主要著作〉『和みを紡ぐ——子育てひろばの会話分析』勁草書房, 2018年。「例外扱いする特権——母親による子どもに対する『この人』という指示」『社会学評論』67(3): 319-37, 2016年。

*中 島 満 大 (なかじま みつひろ) 第6章, インタビュー・エッセイ, おわりに
明治大学政治経済学部専任講師

〈主要著作〉『近世西南海村の家族と地域性——歴史人口学から近代のはじまりを問う』ミネルヴァ書房, 2016年。「宗門改帳からみた〈家族〉の実現性」『社会学評論』69(3): 287-302, 2018年。

*森 本 一 彦 (もりもと かずひこ) 第8章
高野山大学文学部教授

〈主要著作〉『先祖祭祀と家の確立——「半檀家」から一家一寺へ』ミネルヴァ書房, 2006年。『リーディングス アジアの家族と親密圏』全3巻(落合恵美子・平井晶子との共編)有斐閣, 2022年。

Sandra SCHAAL (サンドラ・シャル)

第9章

ストラスブール大学教授, The Asian Platform for Global Sustainability & Transcultural Studies (AGST) 特任教授 (Center for the Promotion of Interdisciplinary Education and Research, University of Kyoto)

〈主要著作〉SCHAAL Sandra (sous la dir. de), *Modan: La ville, le corps et le genre dans le Japon de l'entre-deux-guerres*, Picquier, 2021. 『「女工哀史」を再考する——失われた女性の声を求めて』京都大学学術出版会, 2020年(2021年度和辻哲郎文化賞)。

宮 武 実 知 子 (みやたけ みちこ)

コラム②

主婦

〈主要著作〉「沖縄文化」筒井清忠編『昭和史講義【戦後文化篇】(上)』ちくま新書, 2022年。ジョージ・L・モッセ著, 宮武実知子訳『英霊——世界大戦の記憶の再構築』ちくま学芸文庫, 2022年。

金 春 喜 (きん ちゆに)

第 10 章

ハフポスト日本版ニュースエディター

〈主要著作〉『「発達障害」とされる外国人の子どもたち——フィリピンから来日した
きょうだいをめぐる、10 人の大人たちの語り』明石書店、2020 年。

嘉本伊都子 (かもと いつこ)

第 11 章

京都女子大学現代社会学部教授

〈主要著作〉『国際結婚の誕生——“文明国日本”への道』新曜社、2001 年。KAMOTO
Itsuko, “Japanese International Marriages (*Kokusai Kekkō*) : A Longue Durée
History, from Early Modern Japan to Imperial Japan” (Tr. Nadia Kanagawa) in
Williams, Duncan eds., *Hapa Japan: History*, Vol.1 : 103–25, Kaya Press, 2017.

山下 泰 幸 (やました やすゆき)

第 12 章

京都大学文学研究科博士後期課程

〈主要著作〉「ミクロな観点における同化とポストコロニアル性——フランスの高学
歴なムスリム女性の語りから」『ソシオロジ』67(1) : 21–38, 2022 年。「フランス
のミドルクラス・ムスリムの階級的な差異化に関する一考察」『京都社会学年報』
30, 2022 年。

RAJKAI Zsombor Tibor (ライカイ・ジョンボル・ティボル)

第 13 章

立命館大学国際関係学部教授

〈主要著作〉『競合する家族モデル論』京都大学学術出版会、2014 年。*Family and
Social Change in Socialist and Post-Socialist Societies: Change and Continuity in
Eastern Europe and East Asia* (The Intimate and the Public in Asian and Global
Perspectives, Vol. 6), Brill, 2014.

伊 達 平 和 (だて へいわ)

コラム③

滋賀大学データサイエンス学部准教授

〈主要著作〉「医療ソーシャルワーカーの依存症への関わり方の積極性に対する規定要
因——自己責任論に着目して」(堀兼大朗・野村裕美・稗田里香との共著)『社会福
祉学』63(3) : 28–40, 2022 年。「高学歴が家父長制意識に及ぼす影響についての比
較社会学——日本・韓国・台湾・中国・ベトナム・タイにおける比較」『社会学評
論』64(2) : 187–204, 2013 年。

目 次

はじめに

i

執筆者紹介

vi

序 パーソナル・イズ・ポリティカル

落合恵美子 ● I

〈わたし〉から始まる社会学のゆくえ

- 1 パーソナル・イズ・ポリティカル I
- 2 出産の社会史 2
- 3 育児ネットワーク 4
- 4 人口学的転換と育児ネットワークの再編成 6
- 5 近代家族の誕生と孤立育児 9
- 6 アジア社会の育児ネットワーク II
- 7 育児ネットワークから福祉レジームへ 15
- 8 フランスのケアダイヤモンド 19
- 9 親密圏と公共圏の再編成 22

第 I 部 「近代家族」は変わったか

第 1 章 妻の脱主婦化の落とし穴と夫の働き方の問題 片田孫朝日 ● 26

家内労働時間を含めた総労働時間の長期間の分析から

- 1 仕事をもつ妻の日常 26
- 2 総労働時間で読み解く妻の脱主婦化——課題とデータ 27
家族の戦後体制のあとに (27) 社会生活基本調査と総労働時間 (28)
- 3 妻の脱主婦化の落とし穴 30
夫の仕事時間の増加と妻の仕事時間の減少 (30) 仕事時間の性別分化の要因 (33) 国際比較では長い女性の仕事時間 (34)
- 4 妻の仕事時間の減少と夫婦の総労働時間の接近 34
睡眠時間と余暇時間の夫婦間格差 (34) 共働き夫婦の総労働時間の接近 (37) 家内労働時間の分化と育児中心化 (38)
- 5 夫の働き方の問題 40
- 6 日本の共働き夫婦の現在地 42

第2章 女性就業の地域的多様性

織田暁子 ● 45

福井県におけるM字型カーブの推移

はじめに (45)

1 日本の女性就業率 46

M字型カーブの推移 (46) M字型カーブからL字型カーブへ
(46) 女性就業率の地域差 (48)

2 福井県の事例 49

福井県の就業率 (49) 「福井モデル」への注目 (50)

3 福井県の女性就業率 51

女性の就業率の推移 (51) 正規雇用就業率の分析 (52) 福
井県内の地域差 (55)

4 地域における女性就業の推移 57

第3章 日本における「近代家族論」の展開と社会へのインパクト

新聞の子育て言説を中心に

中里英樹 ● 60

はじめに (60)

1 家族言説の変化 61

2 新聞記事にみる「近代家族」概念の広がり方 63

3 近代家族論を通した現代家族のとらえ直し 67

4 「三歳児神話」 68

5 育児ノイローゼ・育児不安——事件から支援へ 73

6 近代家族論は社会にどのようにインパクトを与えたのか 77

第4章 育児と仕事の競合

鄭 楊 ● 79

中国における「専業主婦」の母親規範を問い直す

1 中国女性の理想の女性像 79

国家政策の男女平等と改革開放後の「婦女回家」論 (79) 都市
部女性の就業率はなぜ低下し、すぐに再上昇したのか (80)

2 中国都市部の近代家族 81

働く母親の離脱した家と専業主婦の復帰する家 (81) 「近代家
族」の誕生と多様な「近代家族」の混在 (82)

3 時代で変わる女性の就業と母親規範 84

1950～80年代の計画経済期における「働く母親」と「専業主婦」
の対立関係 (84) 1980～2000年代の市場経済期における「子ど
も中心主義」と「よき母親規範」の登場 (85) 2000～20年代の
グローバル経済期における「科学的育児」と「スーパーママ」の
葛藤 (87)

- 4 インタビューからみえてきた現代の競合する育児と仕事 88
調査概要 (88) 子ども中心主義と「よき母」の役割遂行の多様性 (89) 「自己価値」への疑問——キャリアウーマンと「専業ママ」の競合 (93) 世代間に圧縮された「近代家族」の多様性と「仕事＝女性の社会的価値」の連続性 (96)
- 5 「子ども中心主義」に基づく子育てと世代を超えた理想の女性像 101

第5章 「タイガー」マザーと「不合格」母 郝 洪芳● 107 アメリカ中華系の親子関係と中国の親子関係の比較

- 1 北米中華系の世代間関係の表象 107
- 2 海外の親子関係と中国の親子関係の比較 109
- 3 タイガー・マザーと「不合格」母の例 110
タイガー・マザー (110) 「不合格」母 (113)
- 4 2組の母たちの子育て 115
チュア：異文化間のアイデンティティの交渉 (116) 沈：個人のアイデンティティと母のアイデンティティの衝突 (116)
- 5 異なる社会に生きる女性たちのアイデンティティのずれ 117

◆コラム① 育児ネットワークと会話分析 戸江哲理● 120 育児ネットワークの研究のインパクト (120) 育児ネットワークの内実 (121) やりとりとしての育児ネットワーク (122)

第II部 わたしたちはどこから来てどこへゆくのか

第6章 子どもはどちらについていくのか 中島満大● 128 徳川時代の子どもと離婚

- 1 現代からさかのぼる離婚と子どもの所属 128
現代日本における子どもと離婚 (128) 明治時代における子どもと離婚 (130) 徳川時代における子どもと離婚 (131)
- 2 データと対象 134
『野母村絵踏帳』における結婚と一筆 (134) 操作化 (136)
- 3 離婚時における子どもの所属 137
子どもの性別 (137) 婚外出生と連れ子 (138) 母親の結婚形態——嫁入婚と婿取婚 (140)
- 4 おわりに 142

第7章 伝統家族の複数性を読み解く

平井晶子● 147

歴史人口学からの接近

- 1 伝統家族とは 147
2つのアジア (147) 近代初頭の日本が会った西欧家族 (148)
- 2 人口の力・人口学の魅力 150
なぜ人口学から接近するのか (150) 「家族の戦後体制」と人口
学的移行世代 (151) 戦前の家族社会学と人口 (152)
- 3 歴史人口学で読み解く伝統家族——世界に冠たる宗門人別改帳 153
- 4 近世の家族——東北農村の「家」の実像 154
家は代々継承されたのか (154) いつから、いかにして家は続
くようになったのか (156)
- 5 「家」に生きる人々の結婚と出生 157
離婚／再婚とお試し婚 (157) 子どもの性別選択 (158)
- 6 西欧との出会いと「家」の変化 160
- 7 あらためて“伝統”を問う 161

第8章 日本の近代化と家の展開

森本一彦● 164

先祖祭祀の変化を中心として

- 1 家の伝統性 164
- 2 多様な先祖祭祀 165
- 3 現在の半檀家 166
- 4 近世における半檀家 168
半檀家と檀那寺 (168) 半檀家の推移 (170) 半檀家と経済
力 (170) 半檀家と財産継承 (172) 半檀家の解消 (173)
- 5 近代の先祖祭祀 174
民俗学と先祖祭祀 (174) 先祖祭祀と国学 (175)
- 6 先祖祭祀の展開 176

第9章 日本における「近代のエスノグラフィー」の誕生

権田保之助の民衆娯楽論の一考察

サンドラ・シャルル● 178

はじめに (178)

- 1 「近代のエスノグラファー」としての権田保之助——略歴 179
- 2 権田保之助による「民衆娯楽論」 181
- 3 権田保之助と当時の民衆娯楽観 186
おわりに (190)

◆コラム② 〈わたし〉の沖縄家族社会学

宮武実知子●194

沖縄の専業主婦(194) 家族, のようなもの(195) 我が家の歴史と「沖縄らしさ」(196) 「伝統」の再発見(197) 「沖縄の家族」のゆくえ(198)

第III部 国境を越える家族/国境を越える研究

第10章 〈外国人の子どもの声〉が声になるまで

金 春喜●202

特別支援学校への進学を「決めた」のは誰か

- 1 〈外国人の子どもの声〉を求める声 202
- 2 その〈声〉は〈本心〉か 204
- 3 〈外国人の子どもの声〉のない調査 207
子ども不在の調査結果が示唆すること(207) 「間接語法」で再生する〈声〉(207) ケイタクんの〈声〉を手繰り寄せる(208)
- 4 〈外国人の子どもの声〉の行方 218
二重の偽装工作(218) 「失われた〈声〉」に耳を傾ける(220)

第11章 国際結婚で「第1の近代」は揺らいだのか 嘉本伊都子●223

はじめに(223)

- 1 第1の近代における妻と子 224
夫婦国籍同一主義から独立主義へ(224) 男女平等の憲法下の不平等と「家族の戦後体制」(226) 国際結婚からみる「第1の近代」の終焉?(228)
- 2 国際結婚の増加は第2の近代か? 229
女性差別撤廃条約と国際結婚(229) 海外における国際結婚の推移(230) 団塊のジュニアと離婚と未婚率(231)
- 3 子奪取条約とインターセクショナルリティ 234
オリエンタリズムとしてのハーグ子奪取条約(234) 自殺未遂は〈重大な危険〉ではないのか(235) インターセクショナルティ(239) マイクロアグレッション(241)
おわりに(242)

第12章 2つのオリエンタリズム

山下泰幸●245

現代フランスのイスラモフォビアと方法論的オリエンタリズム

- 1 オリエンタリズムを問い直す 245
落合恵美子の研究から(245) 2つのオリエンタリズムの分析(246)

- 2 フランス社会のイスラモフォビア 247
フランスにおけるムスリムの定着 (247) フランス社会を席卷するイスラモフォビア (248) イスラモフォビアとオリエンタリズム (250)
- 3 方法論的オリエンタリズム 252
- 4 おわりに 256

第13章 非西洋文化圏における家族研究 ライカイ・ジョンボル● 260 東アジア、東ヨーロッパとトルコを事例に

- はじめに (260)
- 1 家族研究の制度化 263
家族研究と家族社会学研究 (263) 研究者数、専門雑誌、テキスト (265)
- 2 家族をめぐる研究課題 267
研究テーマの多様性 (267) 家族変動と個人化 (269)
- 3 家族研究と社会環境 270
家族研究とイデオロギー的方向性 (271) 概念の不一致性 (272)
- 4 グローバルな家族研究の可能性と限界 274

◆コラム③ アジア家族の多様性に迫る 伊達平和● 278 アジア家族比較調査の挑戦

- アジア家族比較調査とわたし (278) 調査概要と調査内容 (278)
- アジア家族比較調査からみた性役割意識の諸相 (280) アジアにおける性役割意識の差異をどう読み解くか (282)

◆インタビュー・エッセイ 落合恵美子に聞く! 287

- 1 針の穴から天を覗く——〈わたし〉だけの社会学にしないために 289
- 2 食べられなかったお昼ごはんミニスカとグレーの勝負服 293
- 3 民主的な父と、おんたちの悔しさと 296
- 4 ケアの理論化、そしてケアの社会科学へ 299

おわりに 303

事項索引 307

人名索引 315

序

パーソナル・イズ・ポリティカル

——〈わたし〉から始まる社会学のゆくえ——

落合 恵美子

1 パーソナル・イズ・ポリティカル

「パーソナル・イズ・ポリティカル (The personal is political)」という言葉聞いたことがあるだろうか。この言葉は、1960～70年代に盛り上がりを見せた第2波フェミニズム運動のなかで使われた。フェミニズム運動には2つの波があり、1つ目の波が19世紀後半から20世紀の初めまでの、参政権獲得に収斂していった運動だった。その後、1960年代から70年代ぐらいにまた山があり、「ウーマン・リブ」運動などと呼ばれた。2つ目の波は、公的な世界での権利獲得ということとは別に、日常生活や親密な関係のなかでの「権力」ということを問題にした¹。

普通に恋人や夫婦として付き合っている、そのなかに「権力」がある。彼の嫌がることは言えないとか、拒否しにくいとかいうことがあるとしたら、それは「権力」である。自己主張が強い女性は嫌がる男性といると、女性のほうはどうしてもやわらかくものを言うようになって、はっきり主張しなくなるかもしれない。そうしているうちに、いつの間にか、どちらかの言うことが通り、もう一方はいつも何か我慢しているという人間関係が作られていたりする。

1 フェミニズム運動の歴史については、井上（2021）を参照。

まさにそういうことを「第2波フェミニズム」は問題にした。それを一言で表したのが、この「パーソナル・イズ・ポリティカル」、つまり「個人的なことは政治的である」という言葉だった。「政治的」とは「権力に関わる」ということを意味する。政権に関わるような政治権力だけではなくて、日常のなかにもそういう力関係があるという、広い意味での「権力」であり「政治」である。それを問い直していこうというのが「第2派フェミニズム」の主張だった。

ここで考えておくべきことは、「権力」とは社会的なものだということである。先ほどの例のように、男の子に嫌われないような、いわゆる「女らしい行動」を取っていると、「自然に」自己主張が弱くなって、相手の言うことを聞くようになっていく、という構造がある。その女性個人が気が弱いから、あるいは男性個人が横暴だからそうなるというわけではない。社会に「男らしさ」「女らしさ」というような規範があって、それに沿うように行動しているとそうになってしまう。そういう意味で「政治的」とは「社会的」とも言い換えられる。権力関係は社会的に作られている。

わたしはこの「パーソナル・イズ・ポリティカル」という言葉を、ジェンダーに関することだけではなく、より広く社会学、もしくは社会を考えること全般に適用できる金言として受けとめてきた。性にまつわることばかりではなく、わたしたちが日常で経験すること、パーソナルなことは常に政治的であり、社会的である。そのことを意識して、パーソナルな経験から社会を読み解いていくということが、社会学の一番のおもしろさであり、個人にとって役立つところでもあるだろう。「社会学的想像力」という言葉でライト・ミルズが提起したのもだいたい同じことだろう。

2 出産の社会史

ここからは、わたし自身の研究史をわたし自身の個人史と絡み合わせながら振り返ってみたい。恥ずかしながらわたしは「パーソナル・イズ・ポリティカル」を地でいくような研究をしてきたところがある。

大学院生にお勧めできるような大学院時代をわたしは送っていない。わたしは大学院の修士課程を4年かかって修了した。通常は2年のところ、1年休学

して、さらに1年延長して。どうしてそうってしまったかという、修士課程2年のときに恋愛してしまい、結婚してしまった。わたしは東京の大学に通っていたのだが、やはり院生だった彼が関西の大学に就職が決まってしまった。どうしようかなと思ったが、もう結婚するしかないか、と結婚した。指導教員の高橋徹先生に相談したら、結婚はいいけれど、大学院は1年休学しなさいとアドバイスされた。最初から通い婚みたいなことで、学業と結婚生活が両立するわけがないから、休学しなさい、休学してそれから戻ってきなさい、とおっしゃった。無理をするなというこのアドバイスはありがたかったと、あとからしみじみ感謝している。

修士課程4年目に東京に戻ってきて、今度は京都に通いながら修士論文を書いていたところ、妊娠していることに気づいた。^{うかつ}迂闊なことだが、でもそのときはなんだか嬉しくて、頑張れば両立できるような気がした。もしもこれが修士課程の2年目ぐらいであったなら、研究もうまくいっていなかったから、とでも書けない、産んで書くなどということは無理だ、と諦めていたかもしれない。でも妊娠がわかったときには、幸いなことに修士論文の構想もできていたので、健康さえ気をつければ乗り切れるのではないかと思った。なんとか産めるときに妊娠するというのは、この両立の難しい社会で、幸運なのかもしれない。よく歩いて体調を整えたりしながら執筆を終えた。

修士論文は「出産の社会史」というタイトルで書いた。妊娠したから「出産の社会史」で書いたのではなく、「出産の社会史」を書いていたら妊娠したという順序だった。「出産の社会史」は、歴史人口学と社会史を結合したような論文だった²。どこが社会学だと言われるかもしれないが、社会学のいいところは「何をやってもいい」ということだと思う。経済学や法学だったら、はみ出したらもう、あなたは〇〇学者ではないね、と言われるかもしれない。でも社会学者は、大抵のことをやっても社会の手のひらからはみ出すことはない。

修士論文を書いて見えてきたことが、その後のわたしの研究生生活のモチーフになった。近代以前の出産は、社会に対して開かれた出産だった。当時の絵などを見ると産婆さんが付き添っているが、それだけではなく近所の女性たちも

2 修士論文の要約にあたる落合（1984）は、のちに落合（1989b, [1989]2022）に収録。

集まっている。ヨーロッパの絵では後ろのほうに占星術師がいたりする。占星術師が子どもの運勢を占っている。

日本では夫が立ち会うこともあった。男性は産室に入らなかったといわれるが、地域差がある。日本では入らないところも、入ったところもある。男性がつわりになることもあったという。妻が妊娠している間に夫も気持ち悪くなるので、これを「あいぼ（相棒）のつわり」といった。出産は女性だけがすることではなく、夫も一緒になってする。周囲の人たちがそれを見守り、手助けもする。出産とはそういうものだった。ちなみに、妻の妊娠中に気持ちの悪くなる男性というのは今もいるようだ。

出産というのは、そのように女性1人がするものではなかったが、だんだん「家族化」し、「個人化」していった。近所の人が出産に立ち会うなどということは、今はあまり考えられない。家族すら立ち会えないこともある。近代医療に取り込まれた出産では、妊婦1人が産室で専門家に囲まれて出産する。それはまさに「個人化」された出産である。出産という、私事の極みと今は思われていることが、少し前までは社会的なこととされていた。しかしそれがプライベートなことになり、孤立していった。そういう基本的なモチーフを、わたしはこの研究から得たように思う。

わたし自身の出産のときは、もちろん夫に立ち会ってもらった。日本では里帰り出産が多く、妻の実家に帰って出産することが多いが、経験のあるお母さんに見守ってもらいながら産むので安心な反面、夫と暮らしている場所と実家が遠い場合、夫が関わりにくくなる。里帰り出産では赤ちゃんが産まれた後も夫は一緒にいられない。後々のことを考えるとこれはよくないのではないかと思ひ、わたしは無理やり京都で産んだ。実家の母と夫の母が、子どもが生まれてから交替で手伝いに来てくれた。出産に立ち会い、さんざんオムツも換えた夫と娘はずっと仲よしで、最初の「刷り込み」は大事だな、と思う。

3 育児ネットワーク

子どもを産むと、今度は育児が始まる。育児ストレスも人並みに経験した。夫が仕事に行って、言葉もしゃべらない子どもを1人で世話しているときに、

おわりに

※ 出来の悪い元学生の質問

「落合先生の研究は、どんなふうにつながっているんですか？」

この質問は授業終わりに、学生が落合先生のところへ聞きにいったときのものではない。卒業して十数年以上経った元学生である私と平井晶子が、京都大学の退官を1年半後に控えた落合恵美子に投げかけた質問である。

落合恵美子の研究は、フェミニズム、育児ネットワーク、ファッション雑誌に映る女性像、人口統計と二人っ子革命、出産の歴史社会学、ユーラシアプロジェクトと歴史人口学、親密圏と公共圏、国際比較による福祉レジーム論というように時代や地域、そしてトピックを越えて縦横無尽に展開してきた。けれどもこれほどまで多岐にわたると、それぞれの研究が独立しているようにみえてしまう。実際に多くの読者は自分の領域に関連する著作は読むものの、それ以外の研究はあまり手にとっていないのではないか。もちろんそうした読み方もよいのだけれど、もし個々の研究が有機的につながっているのであれば、それを知らないことは本当にもったいないことだと思う。だが落合恵美子の研究がどんなふうにつながっているのかを、私にはうまく言葉にすることができなかった。落合先生のそばにいて研究にふれていれば、彼女のなかでこれまでの研究が確実に結びついていることはわかる。でもどうやって？

それでは落合先生にこれまでの研究を振り返ってもらい、どのように結びついているのか、何を構想しているのかを私たちに教えてもらおうというむちゃな企画を思いついた。いくら退官という節目であるといえ、こんなむちゃな企画は、落合先生から丁重に断られると思っていた。しかし落合先生は私たちふたりのわがままな願いを聞き入れてくれた。このインタビューから本書の企画が立ち上がってきた。

※ 最終講義ではなく、最終ゼミ？

私と平井先生による落合先生へのインタビューは、最終講義ならぬ、さながら最終ゼミのようだった。なごやかに落合先生の話に聞き入ることも多かったが、ときおり「中島くんはどう思うの？」と意見を求められることがあった。そのときは恥ずかしながら学生時代にタイムスリップしたかのように、あたふたしながら自分の考えを言語化するのがやっとだった。またふとしたときに、落合先生から「これはあなたたちには言っておかないとね」というかたちで言葉が託されることもあった。毎回、インタビューが終わると、私と平井先生はぐったりしていた。ふたりで反省会をしていると、その回のインタビューの反省よりも、現在の自分の研究や研究者としてのあり方について省みることのほうが多かった。

当初は一連のインタビューをまとめて、本にする予定であった。けれどもインタビューだけで本にするのは難しいのではないかと落合先生からの助言もあり、一旦、このインタビュー本はまたの機会にということになった。インタビューのおもしろさは本書のインタビュー・エッセイからも十分伝わると思う。でもエッセイはほんの一部なので、今でも私と平井先生はインタビュー本の企画を諦めてはいない。しかしながら退官まであと1年ほどに迫った2022年2月末、どうすればよいのかと迷っていたときに、京都大学で落合先生の指導を受けている、そして本書にも寄稿してくれた山下泰幸さんから、落合先生の退官記念論集を準備したいという連絡が届き、私たちの企画と合流することになった。そうしてようやく本書の輪郭が定まり、動き出していくことになった。

※ 研究のつながりと研究者のネットワーク

インタビューを重ねていくなかで気がついたことがある。それは落合先生の研究のつながりについて迫っていくと、彼女がお世話になった先生や友人、影響を受けた研究者の話に結びついていくことである。本書に収録されているインタビュー・エッセイのなかでも、高橋徹、見田宗介、森岡清美などの名前が登場している。女性学では井上輝子、原ひろ子、社会史では二宮宏之、そしてフィリップ・アリエス、女性史では脇田晴子、歴史人口学では速水融、ピータ

ー・ラスレット、リチャード・ウォール、他にもタマラ・ハレブンやバーバラ・ホブソンと枚挙に暇がない。落合先生の研究のつながりの秘密は、こういった研究者のつながりにあるのかもしれない。

また落合自身もそのネットワーキングの恩恵を受けてきたという。たとえば、彼女は脇田晴子が主催する国際会議には若手研究者と呼ばれ、参加している。その会議で出会ったバーバラ・マローニは、後年、*Asia's New Mothers: Crafting Gender Roles and Childcare Networks in East and Southeast Asian Societies* (Global Oriental, 2008) で落合と一緒に編者になった。このような研究者同士のネットワークの大切さを知るからこそ、落合先生は、京都大学グローバル COE プログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」を自らが主導したのではないか。加えて若手研究者をフックアップするために、GCOE で次世代グローバルワークショップを開催し、若手研究者同士のつながりを高めようとしてきたのではあるまいか。

平井晶子が本書の「はじめに」で述べているように、落合恵美子が総合科学としての社会学を構想しているのであれば、ネットワークを重視することは当然のことなのかもしれない。一つの領域に、一つの学問分野に留まっていたは、この壮大な構想は立ち消えてしまうだろう。「社会学だけで社会のことはわからないからね」と落合先生はさらっというけれど、その言葉を紡げる社会学者がこの社会にはどれくらいいるのだろうか。

※ 落合先生の願い

本書には落合恵美子の願いが込められている。それはこの本をきっかけとして、本書に関わった人たちのつながりが生まれたり、結び直されたり、することだ。この本のミーティングでは、「久しぶり！」や「ご無沙汰しています」という声がたくさん飛び交った。そうこの本のおかげで落合先生のもとで学んだ人たちが久しぶりに集まることができた。国際日本文化研究センターや京都大学ではいつでも会えると思っていた人たちとも、卒業したり就職したりすると、何の理由はなくとも顔を合わせることが少なくなっていた。そのネットワークをもう一度この本がつなぎなおしてくれたのである。それに加えて新しいつながりも生まれていた。同じ時期には落合先生の指導を受けていなかったけ

れど、世代を超えて、それぞれの研究やコラム、さらにその人自身のおもしろさに惹かれあって、新たなつながりも芽生えている。きっとこれからもこの本に関わった人、そしてこの本を手にとってくれた人たちと創発的な連帯が生まれてくるだろう。一つの領域だけに閉じこめるのではなく、積極的に複数の領域やさまざまな分野を結びつけながら構想されてきたのが、落合恵美子の社会学なのだから。教え子や読者を巻き込みながら、次のステージへと向かっていく、そんな颯爽とした高揚感を本書から受け取ってもらえたら本当にうれしい。

本書は有斐閣の松井智恵子さんと藤澤秀彰さんのお二人がいなければ、きっと皆さんの手元に届くことはなかった。はじめてインタビュー・エッセイの草稿を松井さんに見せたときに、「とてもおもしろいです！」という言葉が、論考だけでなく、コラムやインタビュー・エッセイが収録されているカラフルな本をつくることを後押ししてくれた。神保町駅のA5出口から大学にむかうのがつらい時期もあったが、きっとこれからは誇らしい気持ちで階段をかけ上がることができる。

それでは皆さん、また会える日を。Let's meet again.

2023年2月

中島 満大

〈わたし〉から始まる社会学

—— 家族とジェンダーから歴史、そして世界へ

Starting Sociology from the Personal: Family and Gender through Historical and Global Perspectives

2023年3月25日 初版第1刷発行

編者 平井晶子・中島満大・中里英樹・森本一彦・落合恵美子

発行者 江草貞治

発行所 株式会社有斐閣

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-17

<https://www.yuhikaku.co.jp/>

印刷 精文堂印刷株式会社

製本 大口製本印刷株式会社

装丁印刷 株式会社享有堂印刷所

落丁・乱丁本はお取替えいたします。定価はカバーに表示してあります。

©2023, Shoko Hirai, Mitsuhiro Nakajima, Hideki Nakazato, Kazuhiko Morimoto, Emiko Ochiai.
Printed in Japan. ISBN 978-4-641-14944-1

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

JCOPY 本書の無断複写(コピー)は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつと事前に、(一社)出版者著作権管理機構(電話 03-5244-5088, FAX03-5244-5089, e-mail: info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。